

『幻想天の河まつり』

原子 修

1 火の粉のカワセミ

太陽が、枝からもがれた浜薔薇の実のように、ぼとりと、ニセイカムシュツペ(層雲峡)の山合いに沈むのを合図に、太鼓は、いっせいに、ドドドドドツと鳴りました。

山のカムイ(神)のまっかな心臓が、力づよくうごきだしたのです。

火よ おきろ

火よ はじけろ

火よ 火よ 火よ

口々にさけびながら、ダケカンバの皮を巻いてつくった松明に火をともし若ものの目も、いまは、燃えさかるほのおでいっぱいです。

ソーウンペツ川は、たちまち、溪谷からはじけてくるルビーいろやオレンジいろの光で、血まみれのようにまりました。

オホオホオホオ

エゾ狼のような声をあげて、人々が、踊りだしました。

火まつりのはじまりです。

そのときでした。

お父さんの松明^{ダイマツ}からとびちった火の粉のひとつが、あつというまに、るりいろと栗いろの織りまざった美しい小鳥のすがたにかわり、トウイー トウイーと鳴きながら、川上めがけて、水面すれすれにとんだのです。

宝石がするりと指からぬけおちてしまったようなさびしさを感じて、リーラは、さびびました。

「待つて カワセミさん」

みんな、火まつりに夢中です。

リーラは、ひとり、石ころだらけの川原を、上流へとかけだしました。

だれかが、私を呼んでいる——そう思うと、もう、リーラは、どんなするどい岩角も、どんな泡だつ急流も、おそれはしなかったのです。

しかし、カワセミは、つばさのはえた宝石のようでした。

つやつやしたコバルト色の背をふるわして、さらに上流へと、飛びさっていきます。

いつしか、火まつりの太鼓の音も、松明の火影もおのいて、両側にそりたつ溶岩台地から、じつとりと重い夕闇がふりはじめたのです。

両岸にそびえる溶結凝灰岩の崖が、リーラめがけて、重い瞼のようにすべりだし、ぴたりと重なりますと、あとは、もう、底なし井戸のような闇があるばかりでした。

2 光のしずく

たしかに、いちばんはじめにリーラを呼んだのは、ローズいろの夕焼けだったのです。

かなしいままでにうす薔薇いろの夕映えは、夜の波うちぎわをあらうさざ波のように、北の空のへりから、美しい声をあげたのでした。

ついで、四千万軒ほどへだたった西空のひくみから、澄みきった純金の声でリーラを呼んだのは、美の女神ヴィーナスの瞳をもつ金

星、つまり、宵の明星だったのです。

そして、やがて、暗黒のドームとなってひろがる夜空に、はじめはうすあかりの帯のようになり、いつしか、むすうの銀のしずくをつかねたじゅうたんのようになり、ついには、二千億もの星の大河となってリーラを呼んだのは、まぎれもなく、十萬光年のかたを流れる天の河だったのです。

そして、さいごに、蝶の羽音のようにかすかな声でリーラを呼ぶ星がありました。それがだれなのかは、知るすべもなかったのです。

3 水いろの球

ピシューと、汽笛が、悲鳴をあげました。それから、すぐ、ヴォオオオんと、汽笛が、落ち着きを取り戻して、腹の底から、「出航」という具合に、大きくのどをふるわせました。

「ここは、どこ？」

リーラが、びっくりして、立ちあがりますと、まっしろい天井に、頭がぶつかりそうになりました。

「しーっ。この船は、もうすぐ、静止系としての三次元の世界から、運動系としての四次元の世界に脱出します。どうか、座席のシートベルトを、しっかりおしめください」

そう言ったのは、とがった鼻と鋭い目つきの男です。みると、体は、美しいりいろと

栗いろの羽毛に光り輝いて、コバルトいろのつばさまでが、つやつやとしています。

「あなたは？」

リーラにみんなまでいわず、その男は、わらいながら、トゥイー トゥイー と、鳴いてみせました。

「わたしは、カワセミのカワツピーと申します。でも、単なる鳥でないということは、わたしが、この、幻想天の河遊覧外輪船『ピシコロチェブ（蝶鮫）号』のキャプテン、つまり、船長だということ、おわかりいただけるかと存じます」

そのとき、船が、ゆらつと、一ゆれして、うごきました。

すっかりうれしくなったリーラが、窓ガラス越しに外をみますと、そこには、ただ、水いろのきれいな壁が、青い花びらのように重なり合っているばかりでした。

「心配ご無用。わたしたちの船は、いま、

ハーバー・イシカリ岳をはなれつつあります」

「それは、どんな港なの？」

「標高一九八〇米光年の高度に、幻想天の

河の出発点をしっかり吊っています」

「でも、外は、なんにもみえないわ」

「じつは、この船は、ひとしずくの水滴から、いま、ぬけようとしているのです」

「信じられないわ」

「直径数ミリの一滴の水は、全宇宙を、そ

のちいさな球の内部によび戻すことができるのです」

「たった一滴の水いろの球から、天の河も、わたしたちの言葉もはじまるのね」

「そして、わたしたちの幻想天の河遊覧外輪船『ピシコロチェブ号』は、ハーバー・イシカリ岳から流れでる天の河の質量に合わせ、自由に形と大きさを伸縮できるのです」

そのとき、突然、船が、垂直に、水の崖を下しはじめたのです。

「さあ、水いろの球をつき破って、外にでるぞ。前のシートの背に、しっかりつかまって！」

ゴーゴーと、水しぶきが轟きました。

耳がキーンと鳴って、おもわず、リーラは、目をつぶりしました。

「おかあさん、助けて！」

と叫んで、リーラは、気を失ってしまいました。

その間にも、幻想天の河遊覧外輪船『ピシコロチェブ号』は、巨大な光の瀧の中心を、流れ星のように落ちていったのです。

4 天の河まつり

「でも、ぼくには、まるで、瀧をのぼってくる、勇敢な魚のようにみえましたよ」

いつのまにか、ひとりの若ものが、草露でびしょ濡れの裸足をふるわしながら、リーラ

の隣のシートに座っていたのです。

「もちろん、原則的には、わたしたちの幻想天の河には、上もなく下もありません。右も左もなく、南も北もなく、すべては、相対的な位置の枝に、仮に羽根をやすめるだけの高速の鳥といえるのです」

考え深げなカワツピー船長の言葉をさえぎって、若ものはつづけました。

「たしかに、この船は、銀河の瀧や羽衣の瀧、夫婦瀧や三段の瀧、さらには不動の瀧や勝瑛の瀧など、幻想天の河にかかった多くの瀧のすべてを、一時に昇っていったようですね」

リーラは、若ものの、ストロベリーのように赤い唇のうごきにみとれました。

船は、水平状態にもどって、恐龍の背のようにそそりたつ溶岩台地の底を、ゆっくりとすすんでいたのです。

「やつぱり、瀧は、幻想天の河に流れこむ、いくつもの星座といえます」

カワツピー船長が、若ものの目をするどくみながら言いました。

「ほら、ごらんない。へび座は、白蛇の瀧となって、鎌首をもたげていますし、りゅう座は、白龍の瀧となって、うねっています」

「じゃあ、ぼくの星座はなんだろう？」

いきなり、リーラの方を向いて、若ものはたずねたのです。

「でも、あなたが、むすうの瀧という異空間を時間的にはまったく同時にただ一隻のこの船が昇っていくのを見たというのは、ほんとう？」

つい、リーラも、たずねかえしてしまったのです。

「たしか、ぼく、溶結凝灰岩をやわらかくおおうシロツメクサの草原で、サフォーク羊の群れを追っていたとおもうよ。すると、とつぜん、いつもみなれている高い山の方からピシューという音がし、それから、ヴォオオオオンという汽笛が鳴って、立ちすくんでいるぼくに、バサツと、大きな尾白鷺が襲いかかってきて、ぼくは、空に吊りあげられたんだ。それから、光の速さで、虚空を移動したけれど、そのとき、ちらりと、この船をみたような気がする」

カワツピー船長が、にやりと笑って、言いました。

「それじゃあ、君は、鷺に姿をかえたゼウスの神が、イダの山からさらって、天上に連れ去ったという、あの美少年ガニュメデスということになる」

「じゃあ、あなたは、鷲座の星アルタイルということになるわ」

リーラの、からかうような言葉を、あわててうちけし、若ものが言いました。

「いえ、ぼくは、けっして、そんなものじ

やあない。第一、ぼくの名は、たしか、ワゾーだし、ほんとうは、ぼく、もっと大きな牧場で、牛を飼ってみたかったんだ」

リーラは、若ものに悪いとおもって、今度は、まじめな口調でたずねました。

「で、この船は、どんな形にみえたの？」

ワゾーは立ち上がり、いきいきと目を輝かして言ったのです。

「蝶鮫です。まったく、両舷に一对の外輪をもった蝶鮫そのものの姿だったのです。へさは鳥のくちばしのようにとがり、背びれ、胸びれ、尾びれは、ぴいんと、まるで風にひるがえる旗といった具合です。なによりめざましいのは、船の表面いっぱい描かれた、むすうの蝶のかたちをした鱗です。しかも、おどろいたことには、氷河期を生きぬいた極北の蝶ウスバキチョウの鬱金いろの羽根やアサヒヒヨウモンの山吹いろの姿、さらにはダイセツタカネヒカゲの渋い鶯茶いろのかたちまでが、それらの好物のコマクサやキバナシヤクナゲなどの花々といっしょに、まるで、大自然のマンダラのように、じつに美しく描かれていたのです」

そのまにも、船は超光速で幻想天の河をすすみましたが、とつぜん、パツと、数万个の花火が一時に爆発したような閃光が、キャビンに襲いました。

そして、まぶしさのあまり、おもわず両手

で目をおおったリーラとワゾーの耳には、たしかに、パチパチとはじける構火や、力づく打ち鳴らす太鼓、そして踊りさざめく人々のかん声までが、はつきりと伝わってきたのです。

「あつ、おとうさんだ！」

目をあけたリーラが、窓ガラスのむこうにうつった人影を指して、高く叫びました。

でも、あつというまに、船は、光と音と群衆のにぎわいを通して、また、もとの、さらさらと瀬々らぐ幻想天の河の流れに身をまかせたのです。

「川岸の火まつりだったんだね」

ワゾーが、なぐさめようとして、言いました。

「おとうさん、きつと心配しているわ」

そのとき、涙ぐむリーラの肩をぽんと叩いて、カワツピー船長が、とても陽気に歌いだしたのです。

「燃えろ 燃えろ

白鳥座

はじけろ はじけろ

ベール星雲

たなびけ たなびけ

光のレース

さあさ

天の河は いつもおまつりだ

光と闇の

ドデーン デデーン

ドツテ ドツデ

ドドーン ドーン

真空太鼓で おまつりだ

天女の衣で おまつりだ

そうだったのです。幻想天の河遊覧外輪船「ピシコロチュエプ号」は、おそらく、地上では、ほんのまたたきするほどの短い瞬間におもわれる時間の流れを、ここでは、気の遠くなるような永遠の航路として、じつにゆったりと旅していったのです。はじまりもなくおわりもない、いつまでもつづく天の河まつりのただ中を、どこまでもどこまでも旅していったのです。

5 チュプベツ・ハーバー

両岸に立ちならんだエゾ松やトド松の標識灯が、パチパチと、躑躅いろや玉子いろに点滅しはじめました。

目をこらしますと、こまかく震えるようにもえる光と光が、ほのおの羽根でふれあつて、いつしか、灯文字をえがきだしていたのです。

——ア トー 光年 デ チュプ

ペツ ハーバー デス

リーラとワゾーは、大声でよみあげ、顔を見あわせて、にっこり笑いました。

デッキでは、ナキウサギ一等航海士やエゾリス甲板員が、いそがしげに、ロープを巻い

たり、ウインチのハンドルのあたりを手でさすったりしています。

鹿爪らしい顔をしたカワツピー船長が、ポプラの木のようにすつくりと立って、言ったのです。

「チュプベツ・ハーバーを、けっして、太陽系とみまちがえないようにしていただきたい。」

ここは、幻想天の河がさしかかった、ほんの、たいらでゆるやかな扇状地性の砂礫質沖積地にすぎないのです。

しかし、この盆地床は、幻想天の河の水源ともいえるヌタカカウシュペ（大雪山系）空間の裏がわから流れだし、チュプベツ星雲、ピイエ星雲、ウシュベツ星雲などが、幻想天の河に合流する、光った沖積土のゾーンで、上陸にはまことに適しています」

「岸におりてもいいの？」

ほとんど同時に、リーラとワゾーが言いました。

「もちろん。でも、トラップをふみはずさないように、気をつけてください。出航は、あと2光年後です」

ふたりは、デッキにとびだそうとして、おもわず、棒のように立ちすくんでしまったのです。

この船のどこに、こんなにも沢山のいのちがひそんでいたのでしょうか。

ムカシトンボ、オオイチモンジ、キベリタテハが、光澤のある羽根をひらいて、デッキキからとびたつていきます。

一方、びしょ濡れの姿でトラップをわたつていくのは、チラカゲロウやナガレトビケラ、アミカなどの水性昆虫の一群です。

いちはやく、岸边にとびさつたのは、キセキレイ、カワガラス、コルリ、コマドリ、エゾムシクイなどの鳥たちです。

これらの虫や鳥たちの顔が、のこらず、いじらしい男の子や女のこの顔をしていたのを、リーラとワゾーは、けつして見逃さなかったのです。

でも、岸のほうからビョンビエンビインとひびいてくるムツクリ（口琴）の音楽が、ふたりに、トラップをおりる勇気をさずけてくれたのでした。

ビアンビオンビウン

ムツクリの美しい音色にむかつて、リーラとワゾーは、風のようにはしつたのです。白樺の薪が、構火台の上から、ラッパの形に焰を吹いています。

マタンブシを頭に巻き、アッシをまとったアイヌの人々が、環になって踊ります。熊の魂を天にかえすためのイオマンテの儀式のまっさい中だったのです。

ピュルルル

美しく飾りたてられた花矢が、宙に射られ

ました。

くるくるまわりながら、虹いろとなつてとぶ矢を、ふわふわした黒雲のかたまりが、追っかけてきます。

熊の子です。

小熊の尾の先に、まばゆく光る大きなダイヤモンドがくつついているのをみて、ふたりは、わあとかん声を上げました。

「とってもかわいいわ」

「尻尾のダイヤモンドが、しゃれているよ」リーラとワゾーは、小熊を追いかけてました。やっとクマザサの茂みの寸前で、まず、ワゾーが小熊の尾をとらえ、リーラが、首すじを抱きしめたのです。

のどをオルガンのように鳴らして低くうなる小熊は、鼻がつめたく濡れ、それはそれはやわらかい毛につつまれていましたから、ふたりが抱きあげて、頬ずりしたのも、無理ならぬことではありました。

そのときです。

クマ笹の茂みの奥から、ヴォルルルオーという、猛獣の吠え声がわきおこりました。

ついで、くろぐろした岩が、むつくりと、やぶの中から立ち上がりました。

母熊です。

するどい爪をむきだし、まっかな口を竈のようにひらき、まっしろい牙をむきだしたのです。

おそろしさのあまり、ふたりは、小熊をばなすと、杭のように立ちすくみました。

すると、七つのダイヤモンドを、尻尾から背中へと美しくつらねた母熊が、急に、にっこりして言ったのです。

「おどかしてごめんなさい。なにしろ、あなたたちとは、ずっと近所づきあいでものねえ。それで、ちよつと、ふざけてみただけなのです」

リーラが、びっくりして、たずねました。

「じゃあ、あなたは？」

「わたしは、大熊座ですよ。ほら、尻尾から背中にかけての七つの星が、なによりの証拠です。」

「北斗七星ですか？」

「そうですとも」

ワゾーも驚いて、小熊に言いました。

「それで、君は？」

「ぼくは、小熊座にきまつているじゃありませんか。」

「じゃあ、君の尻尾の先のダイヤモンドは、北極星つてわけか」

四人は、手を取りあつて笑いました。

やがて、木づくりのテーブルは、母熊のならべる心づくしのご馳走でいっぱいになったのです。

「さあさ、天の河まつりのご馳走です。たくさん食べてってくださいな」

ウラシ（クマザサ）の葉でつくった団子やお茶もあります。フレップ（こけもも）の実でつくったルビーいろのゼリーや、黒い皮のそれはそれは甘いスイカもあります。オオカミの舌のように赤いトマトジュースも、野葡萄の実をしぼってつくったワインまであります。香りたかいキノコ入りのセンベイだってあったのです。

こうして、リーラとワゾーは、ハスカップのリキュールやチコリ茶、アスパラのピクルスまでご馳走になり、さいごには、シナの木
の熊彫り細工までお土産にいただいて、別れを告げたのです。

こうして、ふたりは、出航まぎわの船にもどったのですが、たがいに、じぶんがどの星座のうまれで、どんな運命になっているのか、なぞは深まるばかりだったのです。

6 ビックバンの石炭

いくつもの星雲の、青白い光や消墨いろの暗黒をあつめて、さらに水量を増した幻想天の河は、毎秒四七〇・九〇立方米×無限光年の光流量をしめしながら、ふかくえぐられたカムイコタン変成帯の蛇紋岩溪谷をかくくぐって、一気に、ソーラチ低地帯堆積岩類層の非グリントフ空間へとあふれたのでした。

「わたしたちの『ピシコロチェブ号』は、しだいに、幻想天の河の中心部にさしかかり

ます。いわゆる、レンズ状態の銀河系の、いちばん盛り上がった核恒星系にあたるところです。

でも、レンズといっても、けっして、静止してはおりません。そうです、二千億もの星と、星間ガスや宇宙塵のかたまりとしてこの星雲は、じつは、二億年の周期で自転する渦巻星雲なのです。」

ふたたびうごきだした船の上では、カワッピー船長が、一生けん命に熱弁をふるいました。

すると、いつのまにか前の席に座っていた、青鈍いろのハットをまぶかにかぶった男が、によりと立ちあがって、水いろの細長い顔をきくとカワッピー船長にむけ、質問をはじめましたが、なんと、その顔には、八つの目が、鉛いろの光を不気味にはなっていたのです。

「わしは、アンモコエテス星座……といっても、多分ヤツメウナギ座といった方がわかりやすいと思うが、そこから天の河まつりの見物にやってきたのだけれど、一体全体、直径十萬光年ものこの幻想天の河の、しかも秒速二百五十軒という水速をつつ切っていくこの船のエンジンは、どんな燃料を焚いているのかね」

ぽんと手を叩いて、カワッピー船長が、こたえたのです。

「よくぞ質問してくださいました。それが、わが『ピシコロチェブ号』の、もつとも自慢すべき特徴といえるものなのです」
おもわず、ワゾーが、脇から口をはさみました。

「ぼくも、この船が、すこしも音をたてずに、光の速さですすむのを、とっても不思議に思っていたのです」

「君の考えを言ってみたまえ」

アンモコエテス星座の男が、にやりと笑って、言いました。

「もちろん、この幻想天の河に流れこむソラブチ（空知川）星雲やユーパロペツ（夕張川）星雲の流域には、いまから五千万年前の新生代以降のこのあたりに堆積した針葉樹や広葉樹などの顕花植物の化石が、亜歴青炭やかつ炭となって豊富に埋蔵されています。でも、この船が、あの、黒いダイヤモンドとよばれる、美しい光澤をはなつ石炭を焚いてはしっているとは、到底おもわれないのです」
そこでリーラも、つい、口をはさんでしまったのです。

「この船の、イングリッッシュホルンのような形をした煙突からは、あの、ベトベトした煤を吐きだすまつくろい煙のかわりに、香りのたかいラベンダーや金いろのヒマワリ、雪のようにしろいスズラン、淡紅色にけぶるフレップなどの花々が、ひらひらと、まるで、蝶

の群れのようにふつてくるわ」

勢いにつてワゾーが、言いました。

「だから、ぼくは、この船は、石油とか原子力とかとはちがった、なにか、とっても美しいものをエネルギー源にしていると思うのです」

リーラもすこし上気して言ったのです。

「例えば、風とか、光とか、愛する心とかじゃあないかと、わたしも思うわ」

ふん、とせせら笑って、アンモコエテス星座の男が、八つの目を、こんどは雲母のように光らし

「どれも科学的とはいえないな」

すると、カワツピー船長が、りよう腕を羽根のようにバタバタさせて、言ったのです。

「いえ、どれも、みな、もつともすすんだ科学的考察にもとづいているといえます。つまり、この船は、ダルマストープのかたちをした美しいエンジンに、ほんの真珠の粒ほどの石炭のかけらを投げ入れただけなのです。それで、永久に熱エネルギーを、この船の外輪推進装置に提供することが可能なのです」

「石炭を、どうやって？」

ワゾーが、とびあがって言いました。

「核融合反応炉とか、重力変換装置とか？」

リーラが、目を大きくみひらいて言いました。

「それらよりも、もつと進んでいるのです。私たちの宇宙は、いわば、いまから百五十億

年前のビックバン現象によつて、ほんの小さな物質が大爆発をおこし、急速に膨張して宇宙空間をひろげ、十億年後には銀河が誕生し、百億年ほどたつて太陽系が成立し、やがて、地球がうみだされたと考えられています。いまもつて、この宇宙は、秒速二十四万軒もの高速で膨張をつづけているといわれますから、どんな物質もが、百五十億年前のビックバン現象のエネルギーをうけついでいると思われまふ。

いわば、この船のエンジンは、一粒の石炭のかけらの中にひめられたビックバンの放射エネルギーを、超精密装置によつてとりだして、うごいているのです。

つまり、この船は、石炭の中にやどされている、どこまでも生きつづけようとする時間そのものを焚いてはしるのです」

「じゃあ、カンブリア紀もデボン紀も白亜紀も、みんな、ほうほうと勢よく燃えて、この船のスピードをつくりだすのですね」

ワゾーが、目をかがやかして言いました。そのとき、すこしさびしそくに、リーラがたずねたのです。

「でもねえ、カワツピー船長さん。わたしをこの幻想天の河遊覧外輪船によんでくれたのは、いったい、だれなの？」

いや、それよりも、わたしは、ほんとうはだれ？

わたしの心の中には、いつも、わたしをどこかで待っているはずのだれかをたずねあてたい気持ちの渦巻いています。それは、どんな人？

ああ、ほんとうに、よくわからない。わからないことばかりで、苦しい。

せめて、わたしが、どんな星座のうまれなのか、おしえてくださったらありがたいのですが」

すると、ワゾーも、すかさず言いました。

「ぼくだって、すこしもちがわなない。

ぼくはほんとうは、だれで、どこの星座のうまれなのですか？

ぼくの心の中も、ぼくをどこかで待っているはずのだれかをさがしあてたい思いでいっぱいなのですが、それがどんな人か、ぼくにはわからない。

このまま、こうして、天の河まつりの見物をしていて、ほんとうに、ぼくはいいのでしょうか」

カワツピー船長が、目玉をくりくりとビーム玉のようにうごかし、すこし沈黙してから、にわかに、きまじめな口調で言いました。

「それは、ええと、幻想天の河紀第二百十九日の夜の問題です」

すると、カワツピー船長に合いづちをうち

ながら、アンモコエテス星座の男が、ひっそりとつぶやきました。

「幻想天の河紀第二百十九夜……」

そのとき、キャビンいっぱい、トロンボーンやサクスのファンファーレが、キラキラとひびきわたって、シブシブシアター、つまり、船内劇場の幕が切っておとされたのです。

1 アルコルの少年

「さあさ、お立ち会い、いよいよ、幻想天の河劇の、はじまりはじまり——」

キチヨキチヨキチヨと、くちばしを拍子木のように打ち鳴らしたのは、まっかなベレー帽に白い斑点模様の黒タキシードをぴっちり着込んだエゾオオアカゲラの舞台マネージャーでした。

電灯がパツと消え、幕がスルスルあがると、もう、ステージは、いちめん、サファイアのチカツと光る粒々をさらりと敷きつめた、夜の砂漠です。

月が、プラチナの皿のようにゆれて、青くすきとおった光が、海のようにです。

青白い大波のようにうねる砂丘のかけには、ノウサギ扮する独立運動軍の少年兵士と、キタキツネ扮する人殺しの大泥棒が、息もたえだえに横たわっていたのです。

「ああ、腹がすいて、もう死にそうだあ」
大泥棒がうめきました。

ふたりは、政府軍の牢獄を破って、砂漠を逃げのびる途中だったので。

大泥棒が、靴の底にかくしもったナイフを、そつと取りだすのを見て、少年は、精いっぱいの声で言いました。

「ぼくは、もう、いいのです。さあ、そのナイフで僕を殺し、食べてしまってください。あなたはきつと、生きのびて、この砂漠からぬけられるでしょう」

大泥棒は、ナイフをふりあげました。

刃に、月の光がくだけて、うつくしく鳴ります。

少年の首すじめがけて、ふりおろそうとしたナイフは、でも、力なく、脇の砂の上に落ちました。

「駄目だ、やっぱり殺せない」

大泥棒は、ふうっと大きく息をはいてから、つめたい砂の上で、おおむけに横たわりました。

ほつと肩をおとした少年兵士も、大泥棒のすぐそばで、おおむけに横たわったのです。

ふたりの頭上には、トカチ石の黒い光をといて流したような闇がヒタヒタとひろがり、北斗七星だけが、七つの宝石のようにまたたいておりました。

ふたりは、だまって、星を見上げました。

星の光が、ふたりの、かわききった咽喉をうるおしてくれるような気がしたのです。

やがて、少年が言いました。

「ひしゃく星は、ぼく、大好きなのです。」

ひしゃくの桶のはじから、ドウベ(熊)、メラク(腰)、フェクダ(腿)、メグレッツ(尾の根)、アリオト、ミザル(帯)、そしてアルカイド(葬式の長)、みんな砂漠の民がつけた名です。

でも、ぼくがいちばん好きなのは、ミザルのすぐそばにまたたいている五等星のアルコル(乗り手)です。むかし、砂漠では、アルコルをみわけられたら、目の検査に合格して、立派な兵士になれたのです」

「それで、おまえは、独立軍の兵士になったというわけか」

「でも、ぼくは、射ち合いで、敵を殺さなければならなかった。」

ほんとうに、ぼくは、つらかったのです」
そのとき、ほんのすこし、北斗七星が、地上の方に傾いたように感じて、大泥棒が言ったのです。

「おれが、生れ故郷に舞い戻って、食料品店を襲ったとき、警官隊に追われて、いつのまにか、おふくろの家に逃げこんだ。おふくろは、おれと警察隊のあいだに立ちはだかり、銃弾を浴びながら、おれを逃がしてくれた。」

あのおふくろなら、きつと、いま、空で、ひしゃく星の柄をにぎっている。

きつと、ひしゃくで、銀河の水を汲み、お

れたちに、腹いっぱい飲ましてくれる」

喉がかわいてもう死にそうな少年が、思わず、頭をあげて、言ったのです。

「まちがいなく、ひしゃく星は、ぼくらの方に傾きました」

そのときです。

夜空のたかみから、女のひとの声が、やさしく、切なそうに、ひびいたのです。

「銀河の水は、どちらかひとりしか、のめないのです」

おもわずのべたふたりの手が、宙で氷りました。

そのまにも、ひしゃく星は、ゆっくり動いて、銀河の水を汲み、しずかに向きをかえて、ふたりの横たわる砂漠の方へと、おりてきたのです。

ひしゃくのへりからこぼれ落ちる水のしずくが、キラキラと、月の光にきらめいて、銀河の涙のように、砂漠に吸われていきます。ひしゃくの桶が、目のまえに近づいてくるのを見て、大泥棒がさけびました。

「おれのおふくろの水だ。おれが飲むぞ」桶に手をかけ、口をあけて、銀河の水を飲むとした大泥棒は、しかし、ふと、少年の方をみて、涙ながらに言ったのです。

「やっぱり、ひとりじゃあ飲めない。さあ、おまえ、飲め」

「ありがとう。でも、ぼくは、ほんとうに

いいのです。あなたが飲んで、夜明けには、砂漠を越えてください」

そのまにも、ひしゃくは、ずんずん傾いて、ふたりのすぐそばまでおりてきました。

「はやく、飲め。でないと、殺すぞ」

大泥棒は、ナイフをふりあげて叫びました。

「でも、これは、あなたの水です」

少年が、叫びました。

傾ききったひしゃくからは、銀河の水が、

サラサラと流れだし、砂漠に吸われて、ついに、一滴のこらず、消えていったのです。

大声をあげて、大泥棒が、泣き伏しました。少年の手をしっかりと握り、言ったのです。

「おれたち、いつか、きっと、銀河のほとりで、また会える」

一滴のこらず銀河の水をふりこぼして、ひしゃく星は、また、ゆっくりと、もとの空のたかみに昇っていきます。

少年が、さいごの力をふりしぼって、言いました。

「さあ、僕を食べて、砂漠を越えてください」

大泥棒も、さいごの力をふりしぼって言ったのです。

「おれたち、どこまでも、いっしょに行こう」

幕が、しずかに、おりました。

すっかり明るくなった観客席で、かたく手

を握りあったリーラとワゾーは、不思議な感動の波にゆられて、真珠のしずくのような涙をこぼしながら、言い合ったのです。

「ぼくたちも、どこまでも、いっしょに行こう」

でも、なぜ、そう言ったのか、ふたりには、すこしもわからなかったのです。

8 二万年前のダイビング

「さあ、しっかりと、わしのマントの両はじにつかまっているんじや」

リーラとワゾーは、こわごわ、アンモコエテス星座の男の、鯨いろのマントにつかまって、言いました。

「ほんとうに、大丈夫ですか、幻想天の河の水底深くもぐったりなどして」

三人は、*ビシコロチエプ*号のデッキに立っていたのです。

「ハッハッハッハッハ。この船は、蝶鯨型の外輪船だから、右舷と左舷ではげしくまわっている一対の車輪にさえ気をつければ、あとは、すこしの心配もない」

男が、笑いながら言いました。

「でも、溺れたりはいらないのですか」

リーラが、やっぱり不安でたずねますと、アンモコエテス星座の男は、ふたりの肩を、ほんと叩いたのです。

「この河の水は、みんな、光なのだから、

むしろ、快適というべきだろう」

八つの目を、どこかやさしく光らせて、男は、すらりと長い顔を、得意気に、つるりとなでました。

ふたりが、すこしうちしずんでいるようにみえたので、気晴らしに、幻想天の河の水底めぐりを思いついてくれたのでした。

「それに、どこまで行つたって、わしらは、*“ピシコロチェブ号”*の磁場の中にいて、けっしてはぐれることはない」

そのとき、カワツピー船長ができて、愉快そうに言ったのです。

「この船は、もうすぐ、ソーラプチ（滝川）ハーバーで仮泊します。

ちやうど、このあたりは、フレナイ（富良野）盆地の氾濫原堆積層をつらぬいて流れるソーラプチ（空知川）星雲と、ピッシリ山系から流れでるウリロペツ（雨竜川）星雲が、幻想天の河に合流しますので、にわかに、深度が増し、水中ウォッチングには好適です」

やがて、船のエンジンがとまり、北極星をかたどった五陵の錨がおろされると、もう、三人は、デッキをとびこえて、幻想天の河にダイビングしたのです。

すきとおったさざ波の層のしたには、無色のガラス空間が、水面にうつる光や船の影を、ゆらゆらとしますめています。

どこまでいってもおわらない透明感が、む

しろ、ひやりとつめたく、たちのぼっていき

ます。
体をによろにとくねらして泳ぐアンモコエテス星座の男にすっかりつかまって、ふたりは、さらに、幻想天の河の底深くしずんでいったのです。

やがて、水は、しだいに、エメラルドの宝石のような、固い感じにかわっていきま

した。
中心部からはなたれる重力の光が、いちばん表面に、明るい水いろの帯をうかびあがらせているのでしたが、それをかいくぐって中にはいりこみますと、みるまに、ミント・グリーンから青磁いろへとうつり、インディゴからストーム・グレイへと重さを増し、ついには、鉄いろの闇が、輝いていたのです。

「おどろいてはいけないよ。いま、わしらは、二万光年もある幻想天の河の最深部の入口にいる。

ここでは、暗黒星雲がもうもうとけぶって、星の光をさえぎっているのだ。

落ち着いて話すアンモコエテス星座の男にほつとして、リーラがたずねました。

「でも、魚がみえないわ」
すると、男が、川底の方を指しながら、答えたのです。

「ほら、ごらん、あそこに、魚座の影が沈んでいるよ」

みると、それは、金いろの鱗をふるわせる

エゾウグイだったのです。

「じゃあ、砂のいろで体の色をかえるヌマガレエは、どんな星座の影？」

ワゾーの質問に、男は気前よく答えました。
「鯨座のさ」

こんどはリーラが聞く番です。

「では、あのサワガニは、蟹座の影？」

「そのとおり」

こうして、幻想天の河のイシカリワカサギもイトヨも、星座の影と知ったワゾーは、さいごにたずねたのです。

「では、あなたのアンモコエテス星座の影は？」

そのとき、男は、みるみる、一匹のカワヤツメに姿をかえて、言ったのです。

「それは、わしじゃ、つまり、ヤツメウナギじゃ。

では、さようなら。わしは、幻想天の河のくらしい川底でひとねむりしたい」

さびしくなつて、リーラが言いました。

「いつしよに*“ピシコロチェブ号”*に戻りましようよ」

「いや、君らは、ここから垂直に浮上すれば、一瞬のまに、船に戻る。

天の河まつりも、にぎわいを増すだろうから、あとは、サーモン星座のおばさんが、水平方向のガイドをしてくれる」

言い終わって、もう、カワヤツメになった

アンモコエテス星座の男は、幻想天の河の底によどむ暗黒星雲にもぐりこみ、八つの目をぴたりと閉じると、泥のようにねむりこけてしまったのです。

9 ウォーターフロント音楽会

船上レストランのテーブルにつくと、銀いろのぴっちりしたスーツの女が、歯切れのいい口調でリーラとワゾーに、料理をすすめました。

「さあさ、たとと召し上げ。天の河のまつりのクライマックスが間近です。しつかり腹ごしらえしなくちゃあ」

サーモン星座の女は、うすい薔薇いろの頬を、いきいきと上気させて、まつりの山場が近いのを感じさせるのでした。

おなかのすいたふたりは、並べられたご馳走にとびついたのでした。

シールドのグラスが、雪のようにしろい泡を吹きあげました。新鮮なベリージャムが、しぼりたての夕陽のいろにそまっています。皿の上では、まっぶたつに割られたメロンが、月のように、青い果肉をさらしています。パウチされたタモギ茸の缶詰があげられています。

中央の花瓶に投げこみされた白百合の切り花が、ぷーんといい匂いをはなっていて、リーラとワゾーは、すっかりうれしくなりまし

た。

「でも、あなたが会おうとしているのは、どんな人？」

リーラがワゾーにたずねたのです。

「わからない。でも、君は？」

ワゾーが、聞きかえました。

「わたしも、じぶんが、だれに会おうとしているのか、わからない。でも、きつと、その人は、わたしの中にいるような気がする」

「ぼくだって、そんな感じがする」

「でも、なぜ、あなたは、ワゾーなの？」

「わからない」

「そして、どうして、わたしは、リーラなの？」

ふたりが、思いに沈むのをみて、サーモン星座の女が、ピチピチした口調で言いました。

「さあ、デッキにいきましょう。ウォーターフロント音楽会のはじまりです」

こんどは、船が観客席で、岸辺につくられたステージには、青鷲のオーケストラが、ぎっしりと、蝶ネクタイの演奏姿をならべています。

シヨウドウツバメの司会者が、燕尾服の襟を手でしごきながら、曲目の紹介です。

「ただいまから、イシカリペツ（石狩川）は、幻想天の河」を演奏いたします。終わったら、盛大な拍手をお願いいたします」

トランペットがキラリと光って、序奏のは

じまりです。

フレンチホルンの吹く水いろの旋律が、コントラバスの低いささやきにかさなり、やがて、サラサラと第一バイオリンの絃音がせせらいで、指揮者の青鷲のふるタクトが、まるで、けつしてとけない氷柱のようにきらめいていたのです。

うっとり聴きいるリーラとワゾーのまえに、さつと、鳥たちの大合唱団が、姿をあらわしました。

高音部は、幻想天の河の上流をすみかとするコルリ、オオルリ、コマドリ、エゾムシクイ、キセキレイたちです。

そして、中音部は、中流あたりの、キジバト、カッコー、ヒバリ、ホオジロ、コヨシキリ、エゾセンニユウ、モズ、オオジュリンなどで、低音部は、下流一体のハクセキレイ、シギ、チドリ、ドバト、ムクドリ、カモたちです。

幻想天の河のゆったりした流れをおもわせる、アンダンテ・カンタービレの美しい管弦楽にあわせて、大合唱団は、ひびきたかくうたったのです。

「イシカリペツは幻想天の河

光の乳で

北の大地をうるおし

緑の森をやしなう

イシカリペツは幻想天の河

ロマンの水で

銀の魚をふとらせ

星座の鳥をそだてる

イシカリベツは幻想天の河

宇宙の愛で

人の心をひろくし

命の夢をつちかう」

ついに、美しい終曲がかなでおわると、みんな立ちあがって、拍手大喝采です。

そして、アンコールの曲が、とつぜんあらわれたケフェウス座のバリトン歌手と、カシオペア座のソプラノ歌手の二重唱でうたわれたのです。

まず、はじめは、男性歌手でした。

「幻想天の河の

西の岸に住む

いとしい人よ」

すると、女性歌手がそれにこたえて、うつとりするような歌い合いがはじまったのです。

「でも、あなたは

いつも東の岸にいて」

「わたしたちは

愛し合っているのに」

「とつても深く

愛し合っているのに」

「なぜ

一年に一度しか」

「たった一度しか

お会いできないのです」

「おお

西の岸でいつも機織る

いとしい人よ」

「おお

東の岸で牛を飼う

いとしい人よ」

あまりの悲しい歌に、つい、拍手もわすれて、リーラとワゾーは、しっかりと手をにぎり合い、胸の奥からわいてくる不思議な思いで、熱い涙にむせんだのです。

「いまのは、天の河の西側にある琴座の織女星ベガと、東側にある鷲座の牽牛星アルタイルの、美しくも悲しいお話です。

父の天帝の言葉にしたがって機を織っていた織女は、牽牛とよばれる向岸の牛飼いの若ものを、それはそれは深く愛したのです。

やがて、ふたりは結ばれましたが、もう機織りには精ださないう織女に腹をたてた天帝は、織女を宮殿に連れ戻してしまいました。

ふたりのあまりの悲しみように、天帝も心をうごかされ、年に一度だけ、ふたりが会うのをゆるしたのです。

七月七日の夜、晴れていれば、カササギたちの作る橋をわたって、織女は、天の河をわたり、いとしい牽牛のもとにいけるのですが、雨になれば、もう一年待たねばなりません。

これは、中国に伝わる伝説ですが、いまでも、このあたりの人々は、その夜雨が降りませんようにと、星まつりをするのです」

サーモン星座の女の、なにか訳ありげな説明に、リーラは、答えたのです。

「たなばたのお祭りですね」

「ええ。とりわけ、このあたりでは、八月

七日にするところが多いのです」

ワゾーが、しみりと言いました。

「ぼく、とっても他人ごととは思えない」

リーラも言いました。

「牽牛と織女の話、なにか、じぶんのことのようにつらいわ」

そのとき、デデデデデッと、両岸で、いっせいに、太鼓が鳴ったのです。

牽牛星と織女星の物語に心をうごかされたかのような強い響きで、千の心臓、万の鼓動が一時にはじけるような勢いで、幻想天の河の全流域に生いしげるカツラ、オニグルミ、ケヤマハンノキ、ドロノキ、オオバヤナギ、ハルニレ、ヨシなどの木や草が、緑の神経のように震えおののくほどに、デデデデデッと、太鼓が鳴ったのです。

幻想天の河の東岸からは、ヒマツリ太鼓、ヨシツネサクラ太鼓、ハゴロモ太鼓、ビエイシラガネ太鼓、フキアゲ太鼓、ホツカイワラベ太鼓、キタヒロシマフルサト太鼓、ナンポロ太鼓、マオイ太鼓、スズラン太鼓、ミノリ

太鼓、クリサワ太鼓、トンデン太鼓、アカビ
ラ太鼓、ミカサ太鼓などが、デデデデデッ
と鳴ったのです。

幻想天の河の西岸からは、モセウシコガネ
太鼓、ホツカイカバト太鼓、トウベツ太鼓、
イシカリ太鼓などが、デデデデデッと、鳴
ったのです。

そして、ついに、幻想天の河の両岸から、
いつせいに、火花が、ドドドドドッと打ち
上げられ、流域に咲きほこる花々のかたちを
いろとりどり宙に描くのを合図に、「ピシコロ
チェブ号」は、ヴォオオオオンと汽笛を鳴らし、
うごきだしたのです。

ルビーいろやプラチナいろ、金いろや銀い
ろ、木賊いろや夏虫いろ、龍胆いろや躑躅い
ろ、菖蒲いろや茜いろ、桜いろや萱草いろ、
樺いろや蛍いろ、山吹いろや柳いろ、董いろ
や桔梗いろ、葡萄いろや牡丹いろのうつくし
い光のしずくを全身に浴びながら、蝶鮫の形
をした遊覧外輪船「ピシコロチェブ号」は、
幻想天の河の、すきとおった水をかきわけ、
うごきだしたのです。

10 幻想天の河紀第二百十九夜

「みなさん、お待たせいたしました。いよ
いよ、本船は、全長二百六十八軒光年におよ
ぶ幻想天の河蛇行ラインの最終部分にむかっ
て、航行をはじめました。」

左右にひろがるイシカリユーフツ低地光雲
は、総面積一万四千三百三十平方軒光年に達
する幻想天の河の全流域中の中枢を占めると
ころで、三万光年以前は宇宙の海でしたので、
ほら、いまも、六万ヘクタール光年もの泥炭
地光雲がたなびいて、地質的にも不安定な軟
弱地盤空間となっています。

しかし、それにしつかり耐えて、じつに、
二百八十万人もの星々が、雄々しく、いのち
の光をはなっているのです」

カワッピー船長の説明をさえぎるように、
幻想天の河の両岸からは、どっと、ときの声
があがって、星まつりの大にぎわいが火ぶた
を切ったのです。

「さあ、いよいよ、幻想天の河紀第二百十
九夜です。」

時間と空間をこえたおまつりのだしものが、
東岸と西岸から、交互に演じられて、競うの
です」

サーモン星座の女が、頬を羞微いろにそめ
て言いました。

そして、雪の冠をいただくアサヒ岳光雲の
神をまつるヌプリ・コロカムイノミが、まず、
東岸で、つつましくおこなわれたのですが、
なぜか、リーラとワゾーは、じぶんの中のだ
れかが姿をあらわしはじめるのを感じて、リ
ーラは西がわのデッキに、ワゾーは東がわの
デッキに、わかれわかれとなって、天の河ま

つりの光景に見入ったのです。
すかさず、西岸では、シュマリナイ湖星雲
の溺れ谷リ阿斯式湖岸空間で、水上ツナヒキ
大会のかん声があがりました。

そんな具合で、東岸から、ソーウンベツ火
祭りや七本のタイマツを焚くナチノ火祭、フ
レピラ火祭りのほのおが宙を焦がしますと、
西岸からは、シャンシャン傘踊りやトンデン
まつり、巨大な龍のちようちんがねりあるく
夜高アンドンまつりが、それにこたえて、幻
想天の河の水面を、火と関の声で、鮮やかに
いろどったのです。

そして、リーラとワゾーは、ますます、じ
ぶんがだれなのか、わかりはじめたような、
変な気持ちになって、じつと、天の河まつり
をみつめました。

そのまにも、東岸では花みこしの花まつり
がはなやかさを競い、ラベンダーまつりや、
ホツカイヘそまつり、千人踊り、BONBO
Nフェステバル、恐龍まつり、蛍の里まつり、
ピパオイの里フェスティバル、しぶきまつり
が渦を巻き、幻想天の河に流れこむユーパロ
ベツ（夕張川）星雲やシーコットベツ（千歳
川）星雲からは、メロンまつり、インディア
ン水車まつり、ムカデまつり、ドローリング
レースまつり、ゴロッケー大会、山車まつり、
レンガまつりが、どつとなだれてきたのです。
そして、負けじと、トーベツ（当別川）星

雲などの流れこむ西岸からは、ヒマワリと太陽のまつりやドロリンレースまつり、ワインまつり、世界儀カツギレースまつり、夏至まつりが氣勢をあげました。

「さあ、幻想天の河の川下りのはじまりー！」

時間と空間をこえて、流域のすべてのおまつりを、ただこの夜の瞬間によび集めようと靈力をふりしぼるサーモン星座の女が、叫びました。

そして、飾りたてられた小舟やイカダやカナーが、チュプペツから、フレナイから、フレピラから、トイピラからいつせいにくりだして、[〃]ピシコロチェブ号[〃]といっしょに、幻想天の河くだりをはじめたのです。

そして、トイピラの川原で、アイヌの人々が、敬虔な面持ちでアシリチェブノミ（鮭まつり）の儀式をはじめますと、サーモン星座の女は、一匹の美しい鮭の姿になって、鮭まつりの祭壇の奥にすいこまれていったのです。

「ああ、苦しい。わたしが、わたしでなくなるわ」

リーラが叫びました。

「ああ、せつない。ぼくが、ぼくでなくなるようだ」

ワゾーが叫びました。

そのときです。

とつぜん、すべてのおまつりが、絵のよう

に氷つてとまり、タオタオと羽音をたてて、いちわの青白く光るオオハクチョウが、舞いおりてきたのです。

「さあ、リーラ、あなたを、琴座の織女星の位置に戻してあげましょう」

おどろくりーラの手をとった白鳥座の女は、こんどは、反対側のデッキのワゾーに、言いました。

「さあ、ワゾー、あなたも、鷲座の牽牛星の位置に戻るのです」

パツと、前方に、海がみえたと思うと、[〃]ピシコロチェブ号[〃]が陽炎のように消え、ふたりは、白鳥座の女の手がすがつて、夏の夜空たかく舞い上がったのです。

「わたしがさがし求めていたのは、ワゾー、あなただったのね」

リーラが言いました。

「ぼくが会おうと思っていたのも、リーラ、君だったんだ」

ワゾーが言いました。

イシカリペツ（石狩川）がしずかに、うたっています。

「幻想天の河紀第二百十九夜」

愛し合う若ものと娘の会合

幻想天の河紀第二百十九夜

空では、天の河をはさんで、西岸の琴座の織女星のベガと、東岸の鷲座の牽牛星のアルタイルが、仲をとりもつ白鳥座のデネブと、

壮大な夏の大三角形を美しくえがいています。

11 わかれ

はつと気がつくと、リーラは、火祭りのはずれのベンチに座っていたのです。

すべては、つかのまの夢だったのでしょうか。

「おかあさんが待っているよ。さあ、帰ろう」

おとうさんが、踊りの環からはなれて、リーラに言いました。

あるきだしたふたりのそばで、イシカリペツが、サラサラとうたっています。

いまにも、幻想天の河遊覧外輪舟[〃]ピシコロチェブ号[〃]が汽笛を鳴らすような気がして、おもわず、リーラは、上流のくらいあたりを、そつとふりかえったのです。

（終）